

こんな日曜日が待ち遠しい。

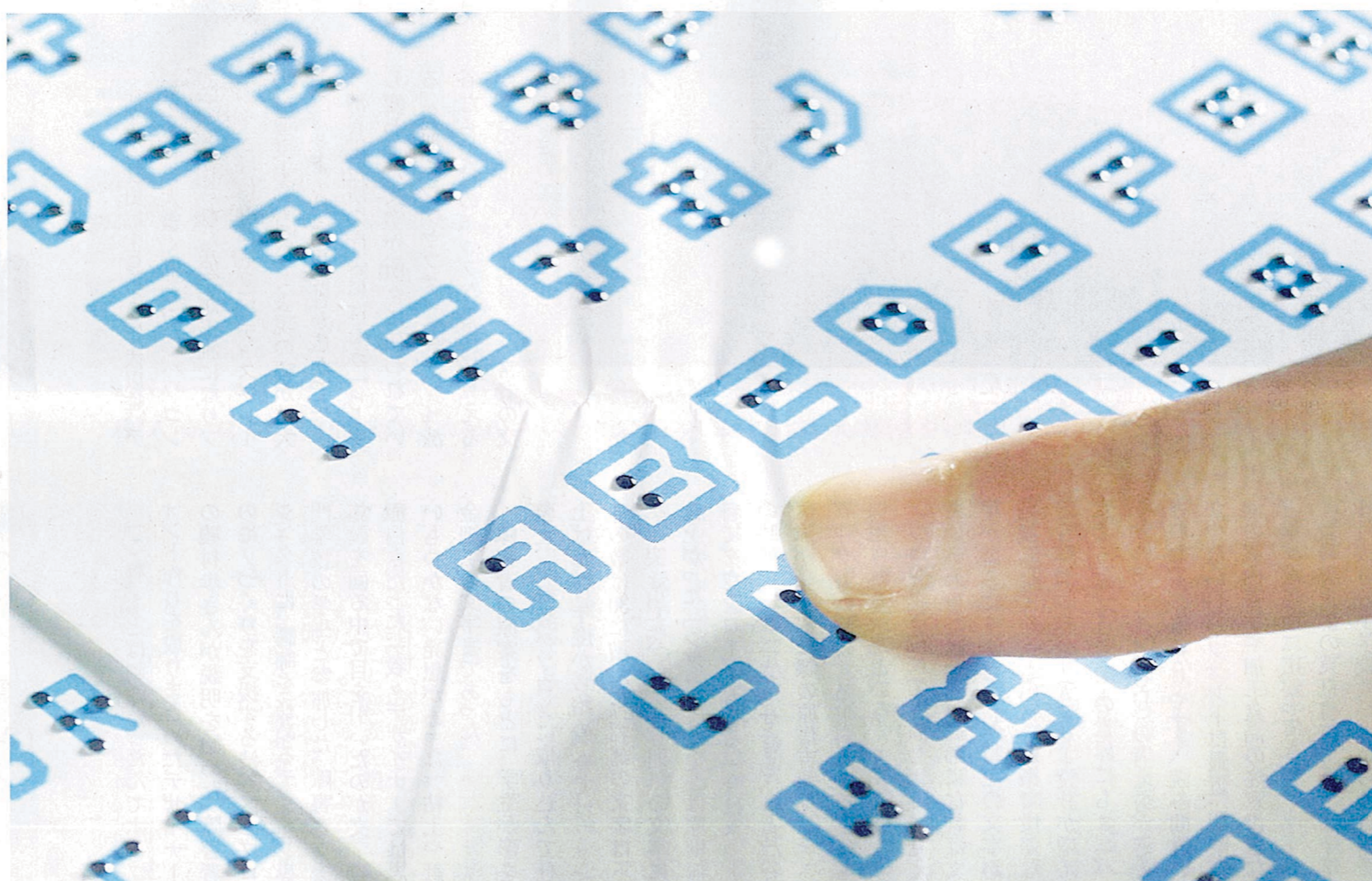
NIKKEI  
The *STYLE*

SHIBUYA FONT

金シャチフォント

BRILLE NEVE OUTLINE

濱明朝



UD  
教科書体

## 文字でつながる、深く伝える 広がるフォントの世界

書籍やパソコンの画面で日々、目にする文字は今、フォントと呼ばれる。

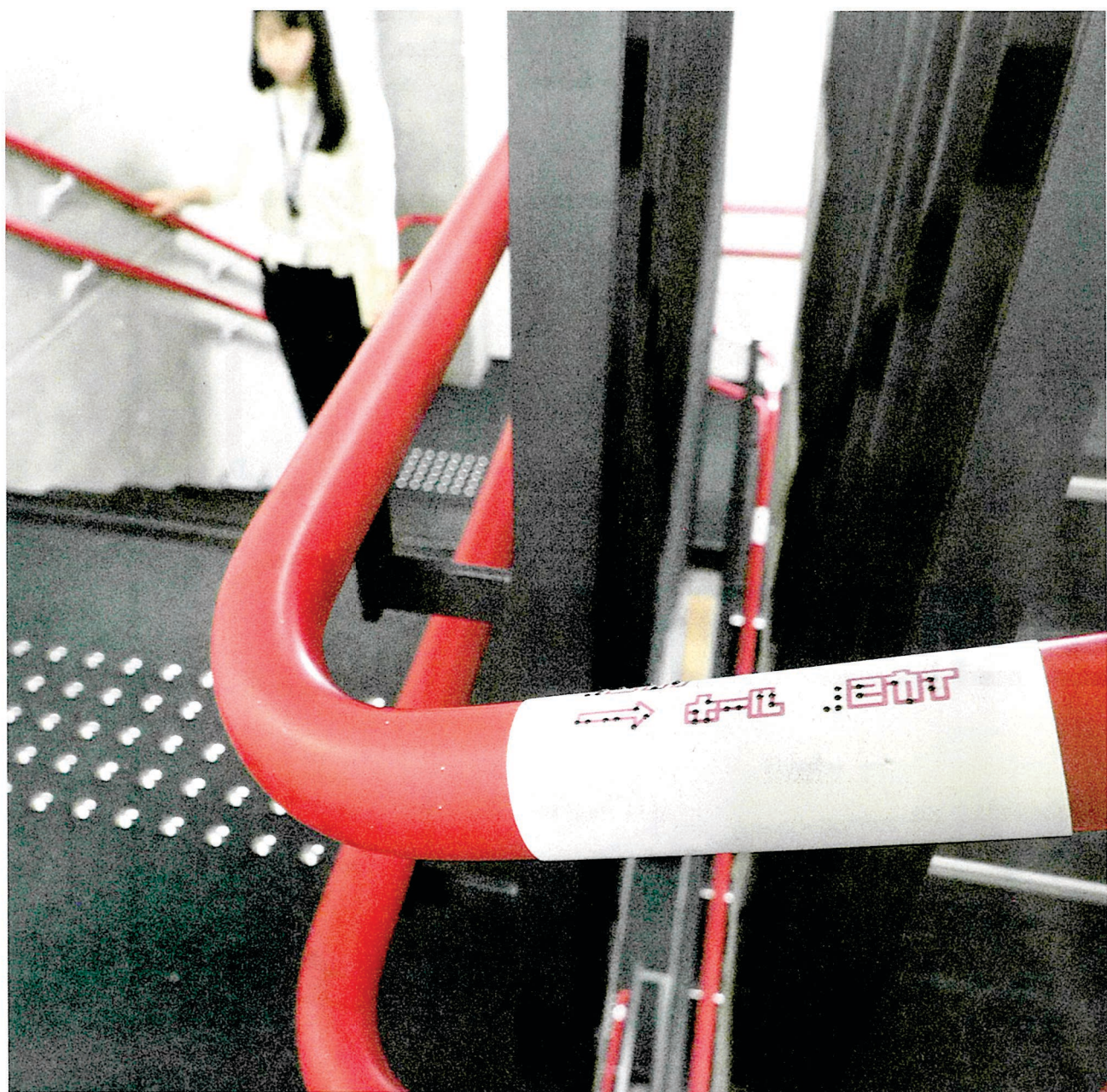
かつて1つずつ手で彫っていた活字はコンピューターで作れるようになり、表現力がより豊かになった。

無言の文字が伝えるのは言葉の意味だけではない。

時には障害や国境を越えて人を結びつけ、そっと語りかけるようにメッセージを伝える。

デジタルの時代に拓くフォントの可能性をのぞいてみた。

# デジタル時代の表現力



渋谷区役所の新庁舎には目の見える人も見えない人も読める「ブレイルノイエ」が取り入れられた。踊り場の手すりには「→ホール 2カイ」と表示されている

## 文字のバリアフリー

エレベーターに乗り込むと階数ボタンの隣に、小さな点が並んでいることがある。「4までは分かるけど、5は？」。数字はまだしも、「開く」や「閉める」となる点と糸口すら見つかからない。そんな経験がないだろうか。

「視覚障害の人から点字なら暗闇でも本が読めると聞いて、素晴らしい世界だなと思いました。でも自分たちは点字を読めないし、どうして読もうとしないのだろう。文字が違っただけで、背を向けている。それなら双方をつなぐ仕組みを作れば、コミュニケーションはもっと豊かになる」

大手広告会社で働く高橋鴻介さんがフォント「ブレイルノイエ」(新しい点字)の意味、表紙の写真を作り始めたのは、こんなきっかけからだった。

点字は縦横最大6つのドットでできている。例えば、左上の端に点1つなら「ア」、その下に1つ加えると「イ」になる。ルールを知らずにいくら睨んでも理解できないが、点の上に「ア」や「イ」の形を重ねてやれば、目で見ても指で触っても読めるようになるはず。発想は単純でも実際に作るとなると「点字のドットにうまく重ね、かつ判読可能なようにデフォルメするの」に苦労した(高橋さん)。既にカタカナ、アルファベット、数字が出来上がり、まもなくひらがなも完成する。

このフォントが2019年に完成した東京・渋谷区役所の新庁舎に採用された。トイレ入り口の案内板には「センジョースイニワ アマミズヲ……」とある。点字は口でしゃべるように表記するのが原則。洗浄はジョーと伸ばし、「は」はワになる。「開発中に点字では『ア』も『I』も『a』も配列が同じことを知りました。自分たちの表記とのズレや、点字独特のルールを知るだけでも、距離を縮めるきっかけになる」と高橋さん。イベントで名札にブレイルノイ

エを使うと、視覚障害者と健常者の会話がいつも以上に盛り上がった。

我々が日々目にしていく活字の起源は、12世紀中国にさかのぼるといえる。最初は泥や木、その後金属に彫られた活字が生まれ、印刷技術の発展とともに出版文化を支えた。そのなかで生まれたのが「書体」。ある一貫したデザイン方針で作られた活字の集まりのことだ。たとえばこの記事は「明朝」という書体で組まれている。明の時代に成立した木版活字に起源がある。

活字の歴史は1990年代以降、デジタル化で大きく変わった。パソコンでデータ化された活字が主流になりフォントと呼ばれるようになった。ディスプレイの解像度上昇もあって表現の幅が拡大しフォントの持つ可能性が広がった。

渋谷区役所の庁舎にはもう一つ、少し変わった文字が所々に使われている。名前を「シブヤフォント」という。渋谷ならではのポップな書体に見えるが、その誕生にも障害者と健常者の交流が隠されている。

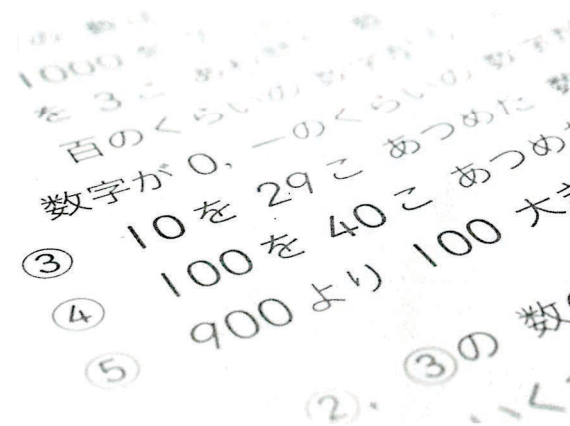
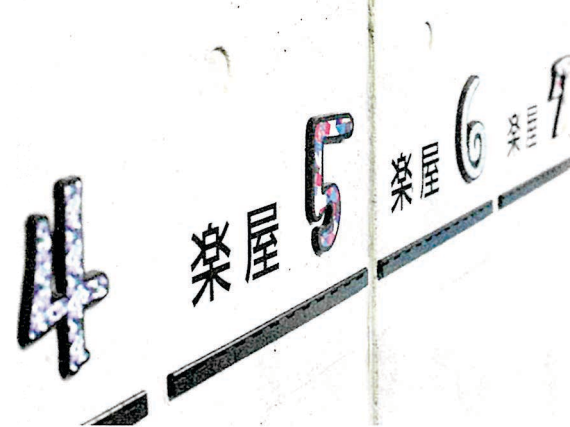
「これ、もとは刺繍だったんです」。フォント作りを取りまとめたデザイナーの磯村歩さんが説明を始めた。障害者のモノづくりを支援する渋谷区のプロジェクトに、講師を務めるデザイナー専門学校の学生と参加した。障害者支援施設を回る中で目を引いたのが文字の面白さだった。「我々デザイナーでは思いもつかない発想があった」。粘土や針金細工の文字まであった。

障害者の原案をもとに、学生が形を整え、それをパソコンに取り込んで仕上げた。17年度から始め、今ではフォントの数は30に増えた。刺繍の文字はトゲが突き出たパンクな雰囲気、文字に仕上がった。「シブヤフォント」は原則無料でダウンロードできる。「今はネットの時代。世界に広がってほしい」と渋谷区障がい者福祉課の原信吉課長。近く、グループが提供する無料フォントにも採用される予定という。

フォントは誰にでも同じように見えているわけではない。高齢になれば文字が読みにくくなるし、特定の文字が判読しにくい人もある。建築で段差などを解消したバリアフリー設計が増えたように、フォントの世界にもユニバーサルデザイン(UD)の考え方が導入された。形が分かりやすく、読み間違いが少ないUDフォントは最近、駅や空港の案内表示や加工食品の注意書きなど様々な場面に広がってきた。

教科書大手の東京書籍(東京)は今年4月改訂の小学校教科書から独自開発したUD教科書体の利用を始めた。これまで主流だった教科書体というフォントは、読み書きに障害のある子供たちには、細い線がかすれたり、曲がって見えたりする欠点があった。かといって、通常のUDフォントでは字体が簡略化されすぎて、実際の筆運びと異なる問題がある。双方の特徴を残し、「書き文字の特徴と読みやすさを共存させた」(同社)。新フォントは障害のない児童でも読みやすく、理解度が上がるという調査もある。

デザイナーの工夫でより多くの人に受け入れられ、それを契機に人がつながる。フォントが秘める力の一つだ。



(写真上)障害者の原案(手前中央)をもとに学生が形を整えた「シブヤフォント」。制作を指導した磯村歩さんは「斬新なデザインに驚いた」と語る(同中)「シブヤフォント」は渋谷区役所の案内表示に使われる。数字を重ねたパターン模様も障害者のデザインをもとにしている(右下)東京書籍は今年4月改訂の小学校教科書に独自に作ったフォントを導入した。読みやすく、文字の書き順にも配慮した